

# 本校の就労支援における中学部の作業学習

## —3つの作業班に共通してつきたい力を考える—

岩本仁 木村有里 富田奈緒子 中村昌宏 野原隆弘

蓮香美園 矢間直世 山内裕史 吉田友紀

伊藤友彦 加瀬進 澤隆史（東京学芸大学特別支援科学講座）

## I. 序および目的

### 1. 中学部の作業学習

作業学習における作業種はそれぞれの学校で創意工夫がされ、設定されている。本校では、陶工作業のための窯の設備や、広大な農場があることからこれらの資源を有効活用した作業種として陶工作業、農耕作業を行ってきた。これらに手工作業を加え、中学部では3つの作業班で作業学習を展開している。

中学部では3年間で各作業種をすべて経験させたいと考えている。農耕作業では主に働く上で身につけたい粗大運動の要素を経験できるように、陶工作業では練り込み皿等の成形を取り上げることで主に手指の操作性を高められるように、手工作業ではアイロン・針・裁ちばさみ等の道具を扱うことを通して安全に配慮する力を培えるように、それぞれの作業種の特徴を活かしながら、働く上での基礎的な経験をより広げられるようにと考えている。

中学部3年間における生徒の実態は精神的にも身体的にも大きく変化する。この段階の生徒の実態をふまえると、働く事をわかりやすく生徒に伝えることが重要であると考え、その為には物を作り育てる経験を通して生徒に成就感や達成感を体験させ、働く意欲や喜び、さらには技術的向上心を育てていくことが大切であると考えている。また、生徒自身が働く上で身につけていかななくてはいけないことや自分自身の課題の理解を図ることで生徒自身が主体的に取り組んでいけるようにすることも大切であると考えている。

### 2. 研究経過と目的

昨年度の研究では、作業学習の授業実践を通し中学部作業学習における「3作業班で共通してつきたい力」について提案し、中学部段階で必要と思われる指導について学部で共通理解を図った。また、その結果を踏まえて支援内容配列表（就労支援）改訂の方向性を探った。作業学習の授業研究や作業日誌の検討等を実践的に行っていくことで、本校の就労支援内容配列表について表1のように内容修正が必要と考えられた。

今年度は昨年度の研究で提案した「3作業班で共通してつきたい力」を事例研究、授業研究を通してこれまでの生徒の成長や変化、教員の支援の方法なども踏まえて妥当性を検証した上で、中学部作業学習における指導指針としていきたい。それに加えて就労支援内容配列表の内容について検討する資料を得たいと考える。

表1 平成23年度研究で検討が必要と思われた就労支援内容配列表の項目と改善点

平成23年度の研究で、検討が必要と思われた就労支援内容配列表の項目	平成23年度の改善点
働くことに関する意識や技能の項目に追加項目はないか。	就労支援内容配列表の項目に追加・修正を行う。
自己理解と職業適性>自己理解・自己選択>「○自分の好きなこと・嫌いなことがわかる。」	好きか、嫌いかで経験を狭めかねない記述になっており、誤解をもたらしかねない為、表記を修正すべき。
自己理解と職業適性>自己理解・自己選択>「○自分の得意なことがわかる」	中学部段階では「自分の得意なことを広げる」の方がよいのではないか。
職業生活の知識と理解>職業生活について>「○作業学習に参加する」	「作業学習で作った製品を販売して得た収入で余暇活動をし、働く生活の経験をする。」のような内容がここにふさわしくないか。

## II. 方法

昨年度の研究で提案した「3作業班で共通してつきたい力」の内容の妥当性を検証するために以下の3つの手続きを行い目的に迫ることとした。

**手続き1 / 3年間の事例研究：**3名の生徒を対象とする。3つの作業班における取り組みの様子から、それぞれの対象生徒の変化を追い、「3作業班で共通してつきたい力」の内容の妥当性について検証する。その結果をもとに支援内容配列表についての修正点について検討を行う。

**手続き2 / 校内実習における生徒の変化：**「3作業班で共通してつきたい力」を検証していく上で、生徒自身がこれらの課題をどのように理解し、より主体的に自分の力を高めていけるかという点に着目し、校内実習期間用の実習日誌を用意し生徒の評価項目の理解について検討する。

**手続き3 / 授業改善：**3年間の事例研究、校内実習の生徒の変化を踏まえ、明らかになった課題や手立てについて検討し授業改善を行う。

## III. 結果と考察

### 1. 事例研究

#### 1) 3事例の概要

同じ学年の3人の生徒を対象に、3年間の作業学習における課題について事例研究を行った。学習場面を4つに区切り、場面ごとに見られる課題の変化を追った上で、「3作業班に共通してつきたい力」を視点に検討した。

対象の3人は、身辺処理については、細部の確認等、支援が少し必要であったものの、中1の時から概ね一人でできていた。現在は一人でほぼ確実に更衣などできている。通学については公共交通機関を利用して一人で通学している。3人とも、初めての活動などはやや不安があるものの、中学部での経験を通して自信を持って行動することができている。

友達関係では、それぞれ特徴と課題があるものの中2の時には学校生活に慣れてきたこともあり、それぞれに自分の主張をはっきりするようになった。しかし、言葉足らずなこともあり、クラス内で言い合いになるなど落ち着きがないことがあった。また言葉遣いもやや乱れていた。教員の仲介で友だちとの関わり方を身につけ、中3になると、上級学年の意識が持てるようになったことや友

達に対する理解が進み、仲間の意見を聞こうとする姿勢も見られ、一緒にスポーツを楽しんだり、相手のことを考えられることが増えてきた。

## 2) 3事例の変化について

### (1) 事例A

表2-(1)-①: 事例A「移動・入室・準備」の課題

#### ①移動・入室・準備の場面

右記のように、中1の時には作業時の挨拶の声が小さく、身支度や準備の取りかかりも悪かった。しかし、中2になって、挨拶や準備全般といった課題はなくなり、身支度の仕方が変わったことに伴う課題に変化した。

中1	声がよく出る時と出ない時がある。挨拶の声が小さい。ある程度作業を経験しないと棒立ちになることが多い。周囲の事が気になり自分の準備ができない。
中2	三角巾が上手く整えられずに、教員の助けを借りることが多い。
中3	

この場面で「3作業班に共通してつけない力」の3つの項目のうち2項目が、指導が必要な項目として取り上げられ、一定の成果が上がった。

#### ②作業中

表2-(1)-②: 事例A「作業中」の課題

右記のように、中1の時には、終わった時の報告ができず、思いこみで仕事を進めたり、集中力が課題だった。中2になり、報告や質問はするものの必要な報告とは言えず、集中力も継続課題となっていた。中3では報告に関する課題はないものの、集中力、仕事の理解という点が課題になった。

中1	仕事が終わると報告できず、話しこんでしまい次の仕事に移れない。勝手に作業を進めて失敗があった。集中時間がやや短く、気が散りやすい。
中2	教員の指示に最後まで注目できない。自信がないときは頻繁に教員に報告や質問をすることがある。活動中、友だちの言動に気を取られる。
中3	友達の言動等に気を取られ、集中していないことがある。班長の仕事も十分理解していない。

この場面で「3作業班に共通してつけない力」の8つの項目のうち5項目「仕事の区切りで報告をする」「わからないことを質問する」「自分の仕事を知る」「自分の仕事に一定時間持続して取り組む」「自分の仕事に集中して取り組む」が、指導が必要な項目として取り上げられた。教員の支援がより間接的になり、生徒自身が課題を意識している様子も伺える等、一定の成果が上がったが、「自分の仕事に集中して取り組む」は作業種が変わっても継続して指導が必要と考えられた。

#### ③休憩

表2-(1)-③: 事例A「休憩」の課題

中1の時は「トイレを済ます」ことが課題となっていた。中2、中3の時は特に問題はなかった。本生徒は、休憩の過ごし方の課題は1年時で身につけることができた。

中1	周囲の友だちと関わりが多く、休憩時間にトイレに行く習慣がなかった。畑に出てから気づくことが多かった。
中2	
中3	

#### ④片付け・反省会・退室

表2-(1)-④: 事例A「片付け・反省会・退室」の課題

1年時は、片付けに時間がかかり、また注意散漫で、日誌の記入が遅くなった。中2になり、片付けの課題はなくなったが、日誌は教員の助けを借りて書いていた。中3になると「振り返りのポイントがしっかり理解できていない」という課題になり、学習場面が変わっても前年度に力を付けたことで、より主体的に作業に取り組むための課題へと中身が変わった。

中1	道具の片付けに時間がかかった。作業内容を振り返りや記入が遅れることが多い。話が長く書くことに集中していない。
中2	少しヒントを出すことで感想など日誌に記入することができている。
中3	評価のポイントが明確でなく、自分で振り返ることができていなかった。

⑤現在の生徒の様子

移動・入室・準備の場面では、教員の話をよく聞き、見本となるような返事もできている。作業中の場面では、時間内に集中して取り組むことができるようになり、「これはどう？」と間接的に尋ねると、どうすべきかにすぐ気づいて直せることが増えた。また、片付け・反省会・退室では、評価のポイントが理解でき、自分で適切に振り返って自己評価することもできつつある。

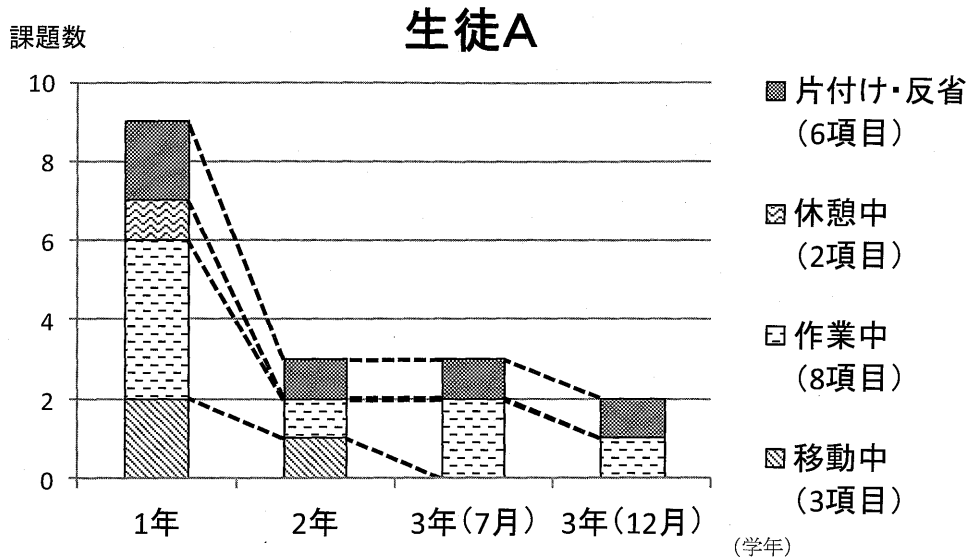


図1-(1) 事例A「3作業班で共通してつきたい力」の課題の推移

(2) 事例B

①移動・入室・準備の場面

右記のように中1の時には作業時の挨拶の声が小さく、作業学習への見通しについても弱かった。中2では挨拶に関しては特に目立たなくなったものの、忘れ物をすることが目立ってきた。中3では作業に必要な道具やファイル類を忘れてしまうことと挨拶の声が小さい、丁寧な言葉遣いができない等の課題が見られた。

この場面で「3作業班で共通してつきたい力」の3つの項目のうち2項目が、指導が必要な項目として取り上げられ、今後も継続指導が必要と考えられた。

表2-(2)-①: 事例B「移動・入室・準備」の課題

中1	具体的な挨拶等は、目で合図する程度であった。 作業学習への見通しがやや弱い。
中2	授業に必要なファイル等を忘れることが多い。
中3	作業に必要な道具(エプロンや帽子の類)を忘れることがある。挨拶や返事の声が小さい、丁寧な言葉を使っていないことがある。

②作業中

右記のように、中1の時には、作業内容がしっかり理解できておらず、報告ができないことが多かった。集中力も持続せず、仕事量はなかなか増えなかった。中2では丁寧な言葉遣いができていなかったり、報告もままならなかった。中3では仕事の内容理解が進まず、質問のタイミングも理解できていなかった。

この場面で「3作業班で共通してつきたい力」の8項目のうち5項目「自分の仕事がわかる」「仕事の区切りで報告する」「自分の仕事に集中して取り組む」「わからないことを質問する」「間違えた時にすぐに報告する」が必要な項目として取り上げられ、課題に対する教員の指導の手立てがより間接的になり、生徒自身が課題を意識している様子もうかがえ、一定の成果が上がった。また、丁寧な言葉遣いができていないことが課題として挙がっており、新たに「3作業班で共通してつきたい力」に必要な項目ではないかと思われた。

表2- (2) -②: 事例B「作業中」の課題

中1	作業内容がわからない。報告できないことが多い。工具の扱いもおぼつかなかった。品物の良い悪い等の判断も難しい。集中時間がやや短く、仕事量が増えない。
中2	教員に対して、友だちと話すような言葉づかいをすることがある。また、忘れたことを教員に報告せずにそのまま過ごそうとする様子も見られる。
中3	新しい作業種のため、どこで質問をしていいのか理解が進んでいない。

③休憩

中1では「仲間とゆっくり過ごすこと」が課題となっていた。中2、中3は特に問題はなかった。本生徒は、休憩の過ごし方の課題は1年時で身につけることができた。

表2- (2) -③: 事例B「休憩」の課題

中1	周囲の友だちと関わりは少なかった。
中2	
中3	

④片付け・反省会・退室

1年時は、作業内容を十分振り返ることができず、日誌の記入が遅くなった。また、忘れ物もあった。中2になり、片付けの課題はなくなったが、日誌は教員の助言を受けながら記入することが多かった。中3になると「振り返りのポイントがしっかり理解できていない」という課題になり、教員と具体的な場面を話し合い、確認しながら日誌をつけることにより少しずつ理解が深まった。

表2- (2) -④: 事例B「片付け・反省会・退室」の課題

中1	作業内容をまとめて記入することができず、時間が掛かる。 作業用品を忘れることが多い。
中2	自分の取り組んだ仕事について適切に振り返りができない。
中3	評価の観点が理解できていない。具体的な場面を思い出しながら評価することで、振り返るポイントが理解できつつある。

⑤現在の生徒の様子

移動・入室・準備の場面では、大きな声で自信を持って返事をする事ができている。作業中の場面では、大きな声で相手に分かりやすく返事ができている。報告のポイントも理解し自信を持ってできている。作業が止まってしまった時「困ってる?」と聞くと報告することができた。また、片付け・反省会・退室では、繰り返し教員と話しあうことで、評価ポイントが明確になった。

## 生徒B

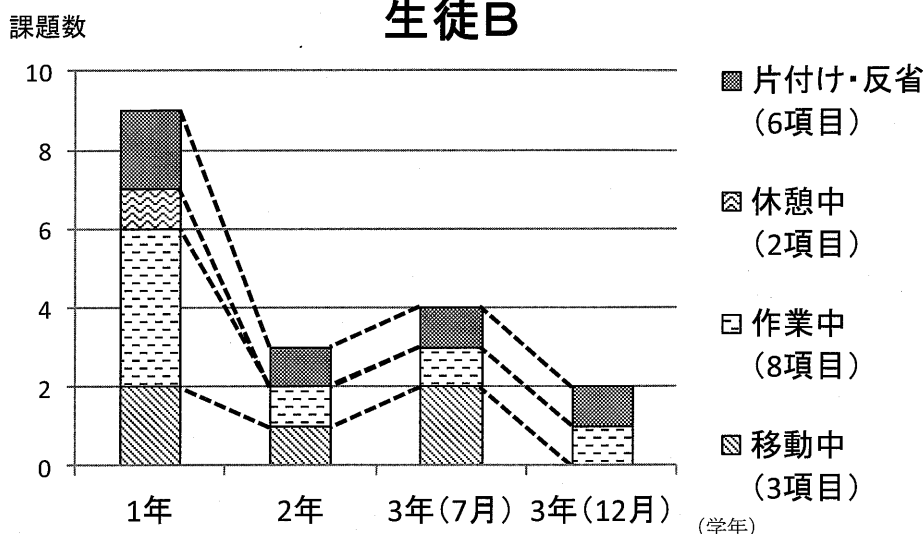


図1- (2) 事例B「3作業班で共通してつきたい力」の課題の推移

### (3) 事例C

#### ①移動・入室・準備の場面

右記のように中1の時には作業時の挨拶の声が小さかった。中2では友達とのトラブルや気分が乗らないなどの理由から遅刻してしまふことが見られた。中3ではこれまでの学年で課題となっていたことがともに課題として挙げられていた。

表2- (3) -①: 事例C「移動・入室・準備」の課題

中1	挨拶の声が小さく聞こえない
中2	気分がムラがあり遅刻してしまうことがある。
中3	遅刻があり、挨拶の声が小さく聞こえない。

この場面で「3作業班で共通してつきたい力」の3つの項目のうち「遅刻せずに入室する」「しっかり挨拶する」の2項目が、指導が必要な項目として取り上げられ、継続指導が必要と考えられた。

#### ②作業中

右記のように、中1の時には、指示がないとなかなか行動することができず、報告なども指示や支援が必要であった。また、集中力も持続しなかった。中2になり、わからないことや間違えた場面でも黙って手を止めたままという状況があり、時間内に作業を終えられないことが多かった。中3でも中2での課題が引き続き指導の対象となった。

表2- (3) -②: 事例C「作業中」の課題

中1	外作業では言葉の指示だけでは行動できなかった。報告できない。工具の扱いもおぼつかなかった。製品の良い悪い等の判断が難しい。集中時間がやや短い
中2	わからないことや間違えた時に聞けない。決められた時間内に活動を終えることができない。
中3	改まった状況では声が小さいため聞き取りにくい。わからないことや間違えた時に聞けない。決められた時間内に活動を終えることができない。

この場面で「3作業班に共通してつきたい力」の8つの項目のうち5項目「仕事の区切りで報告をする」「わからないことを質問する」「自分の仕事ができる」「自分の仕事に一定時間持続して取り組む」「自分の仕事に集中して取り組む」が指導が必要な項目として取り上げられ、課題に対する教員の指導の手だての変化から、支援がより間接的になったものもあるが、「わからないことを質問する」「間違えた時はすぐ報告する」は作業種が変わっても継続して指導が必要と

継続して指導が必要と

考えられた。また、時間内に作業が終われないこともあり、「時間を意識して取り組む」という内容を盛り込むべきではないかと思われた。

### ③休憩

中1では「仲間とゆっくり過ごすこと」が課題となっていた。中2、中3では特に問題はなかった。本生徒は、休憩の過ごし方の課題は1年時で身につけることができた。

表2-(3)-③: 事例C「休憩」

中1	当初は、周囲の友だちと関わりは少なかった。
中2	
中3	

### ④片付け・反省会・退出

1年時は、作業内容を十分振り返ることができず、日誌の記入が遅くなった。また、片付けについても課題が見られた。中2になり片付けの課題はなくなったが、日誌は教員の助言を受けながら記入した。挨拶についてはまだはっきり聞き取れないことが多かった。中3になると「振り返りのポイントがしっかり理解できていない」という課題になり、教員と具体的な場面を話し合い、確認しながら日誌をつけることにより少しずつ理解が深まってきた。

表2-(3)-④: 事例C「片付け・反省会・退室」の課題

中1	道具を一定の場所に片付けられず、時間がかかった。作業内容を振り返るのが苦手で、発表も声が小さいことが多かった。
中2	日誌の記入で自分の仕事についてしっかり思い出せていない。退出時のあいさつの声が小さく聞き取れない。
中3	評価のポイントが明確でなく、自分で振り返ることができていなかった。

この場面で「3作業班に共通してつきたい力」の6つの項目のうち4項目「きちんと片付ける」「自分のやった仕事を振り返る」「自分の目標について振り返る」「きちんと挨拶する」が指導が必要な項目として取り上げられ、課題に対する教員の指導の手だての変化から、支援はより間接的になり、一定の成果が見られた。

### ⑤現在の生徒の様子

移動・入室・準備の場面では、日誌の評価を通して自分で意識して遅刻しないよう気をつけるようになり、挨拶は相手を意識してすることができた。作業中の場面では、自分で意識して相手にわかるよう返事ができている。目標が明確になり早く作業を進めようとする気持ちが出て、教員に遠慮なく質問することができた。また、時計がなくても、周囲や自分のペースを考えながら作業に取り組むことが増えてきた。片付け・反省会・退室では、評価のポイントが理解でき、教員の説明にもすぐに納得できるようになった。本事例を通し「3作業班で共通してつきたい力」に「時間を意識して作業に取り組む」を追加する必要が考えられた。

## 生徒C

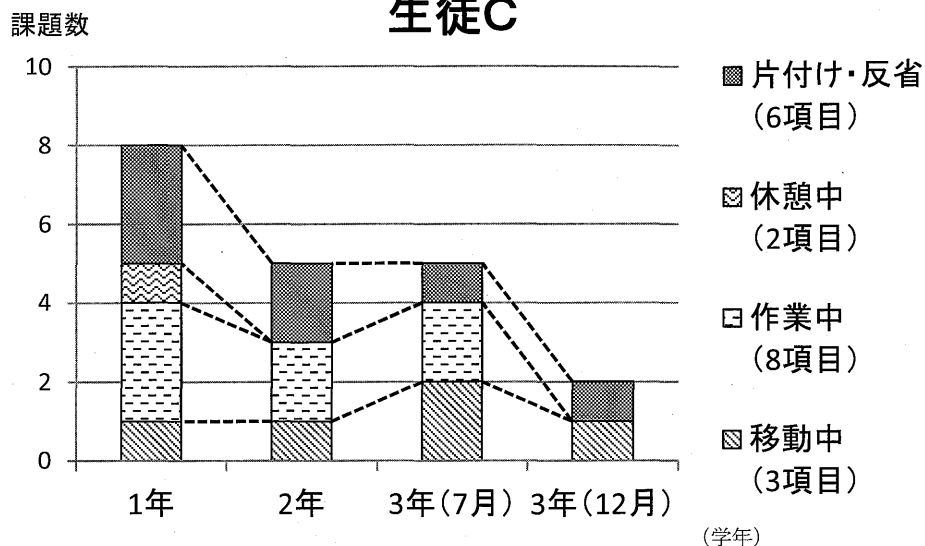


図1 - (3) 事例C「3作業班で共通してつきたい力」の課題の推移

### 3) 3つの事例からの考察

#### (1) 「3作業班で共通してつきたい力」の指導の変化について

3年間の事例研究を通して生徒の課題について考えてきたが、同時に教員の指導や支援の手立てについて、それぞれの項目に対しどのように行われてきたかも整理した。表3のように「3作業班で共通してつきたい力」に対応し段階的な手立てを用いて生徒自身が主体的に行動できるように取り組んできた。

表3 「3作業班で共通してつきたい力」の3事例における指導の手立て

3作業班で共通してつきたい力	指導の手立て
移動・入室・準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>○遅刻せずに入室する。 作業場まで生徒と一緒に行く。 個別に促す。 遅れないよう事前に全体へ指示する。 決められた時間が近づいたら、時計を見るよう促す。</li> <li>○相手にわかるように挨拶をする。 作業場面でのあいさつの仕方を教える。 個別に教える。 あらかじめ言葉をかける。 よくできている生徒をほめ、見本として意識できるようにする。</li> <li>○自発的に身支度・準備に取り組む。 教員が細かく手順を教える。 わからないときは言葉をかける しっかりできている生徒をほめ見本として意識できるようにする。 身支度への支援：教員の見本を見てから、一人で取り組むよう促す。 忘れ物への支援：前日のホームルームで、必要な持ちものを伝える。</li> </ul>
作業中	<ul style="list-style-type: none"> <li>○相手に聞こえるよう返事をする。 具体的に見本を示す。 よく聞こえなかった場合、やり直させる。 よくできている生徒をほめ見本として意識できるようにする。</li> <li>○自分の仕事ができる。 作業前に各生徒に作業の分担を知らせる。 手順表で示す。 担当をホワイトボードや写真カードで示す。 製品づくりの目的（受注先、製品が使われる場面等）をわかるように示す。</li> </ul>



	○仕事の区切りで報告をする。	報告の場面を指示書などでわかるようにする。 様子を見て教員が声をかける。 場面の理解への支援：仕事を始める前に報告する場面を具体的に伝える。 報告への支援：視線を合わせて（または生徒の近くで）報告の必要性に自分から気づけるよう配慮する。 手順表で示す。
	○わからないことを質問する。	生徒の表情や様子を見て教員が声をかける。 作業中動作が止まったら、しばらく待ってから理由を聞く。 場面の理解への支援：仕事を始める前に質問する場面を具体的に伝える。 報告への支援：視線を合わせて（または生徒の近くで）報告の必要性に自分から気づけるよう配慮する。
	○間違えたときにすぐ報告する。	作業を止めて、説明する。 間違いかどうか生徒に確認する。 間違いの理解への支援：間違えたときの製品の見方を伝える。 報告への支援：視線を合わせて（または生徒の近くで）報告の必要性に自分から気づけるよう配慮する。
	○自分の仕事に一定時間持続して取り組む。	作業前にスケジュールを確認する。 作業の手が止まったら言葉かけをする。 目で合図を送り気づかせる。 時々時計を見るよう促したり、教員が現在時刻を知らせる。 作業を始める前に目標を決める。
	○自分の仕事に集中して取り組む。	よくできているところをほめる。 ほめる回数は徐々に減らす。 わからないところは早めに教える。 作業を始める前に目標を決める。
	○自分の目標に向かって作業する。	作業の途中で、その目標に応じて教員が確認する。 製品づくりの目的（受注先、製品が使われる場面等）を、わかるように示す。
休憩	○必要に応じ、トイレを済ませる。	個別に言葉をかける。 間接的な言葉で気付かせる。 全体へ指示を出す。
	○仲間とゆっくり過ごす。	作業を止められない生徒は個別に説明する。 仲間とかかわれるよう、教員が仲介する。
片付け・反省会・退室	○所定のやり方で片付ける。	片付けやすい環境を整える。 個別に片付け方を指導する。 あらかじめ片付け方を確認する。 様子を見て個別に教える。 汚れがあった場合、やり直すよう指導する。
	○自分のやった仕事を振り返る。	教員と項目を確認しながら記入する。 書き終えた後確認する。
	○自分の目標について振り返る。	教員と一緒に確認する。 1度記入してから教員と確認する。
	○作業日誌を記入する。	教員が各項目を説明、確認しながら一緒に記入する。 自分で記入し、教員が確認する。
	○相手に分かるように挨拶する。	挨拶の仕方を全体で確認する。 声が小さい場合は、個別に対応する。
	○忘れ物をしないで退室する。	全体へ指示をする。 退出時に忘れた生徒には個別に声をかける。

## (2) 「3作業班で共通してつきたい力」の追加・修正について

3つの事例を通して昨年度提案した「3作業班共通してつきたい力」がどの作業班に所属しているときでもすべての項目において課題となっていることが明らかになった。また、一部表現を具体的にすることで、指導がより明確になると思われる項目もあった。さらに新たに追加したほうがよいと考えられる項目も明らかになった。次の4項目が追加項目として挙げられた。

- 適切な体の動かし方を身につける。

- 話を聞いて作業に取り組む。
- 時間を意識して作業に取り組む。
- 作業場面に適した言葉遣いや態度をとる。

この4項目を各作業班の作業内容も含め検討し、3作業班で共通した追加項目に「相手の話を聞く」「丁寧な言葉遣いをする」「適切な態度が取れる」「時間を意識して取り組む」が挙げられた。

また、表記については、抽象的な表現からより具体的な表現へと変更することが挙げられた。この事によって教員が生徒に明確に指導することができ、生徒の理解も促されると考えられた。

以上の結果を踏まえて、昨年度に提案された「3作業班で共通してつきたい力」については下記の表3の様に改訂することとした。また、「3作業班で共通してつきたい力」の改定を受けて、支援内容配列表の中学部就労支援の部分の改善点が考えられた。①「自発的に準備片付けができる」。②「話を聞いて作業に取り組む」。③「時間を意識して作業に取り組む」。④「作業場面に適した言葉遣いができる」。の4点が挙げられた。

表4. 改訂版「3作業班で共通してつきたい力」

移動・入室・準備	○遅刻せずに入室する。
	<b>○相手に分かるように挨拶をする。</b>
	○自発的に身支度・準備に取りかかる。
	<b>○相手の話を聞く</b>
作業中	<b>○相手に分かるように返事をする。</b>
	<b>○相手の話を聞く</b>
	○自分の仕事ができる。
	○仕事の区切りで報告をする。
	○わからないことを質問する。
	○間違えたときにすぐ報告する。
	○自分の仕事に一定時間持続して取り組む。
	○自分の仕事に集中して取り組む。
	○自分の目標に向かって作業する。
	<b>○丁寧な言葉遣いをする。</b>
	<b>○適切な態度が取れる。</b>
	<b>○時間を意識して取り組む。</b>
休憩時間	○必要に応じ、トイレを済ませる。
	○仲間とゆっくり過ごす。
片付け・反省会・退室	<b>○所定のやり方で片付ける。</b>
	○自分のやった仕事を振り返る。
	○自分の目標について振り返る。
	○作業日誌に記入する。
	<b>○相手に分かるように挨拶する。</b>
	○忘れ物をしないで退室する。

【\*太字は新たに追加した項目、表記を修正した項目】

## 2. 校内実習期間における生徒の変化から

### 1) 中学部の校内実習と「3作業班で共通してつきたい力」

中学部では年度当初、生徒は縦割りで3つの作業班に分かれて所属する。校内実習は、生徒が所属する作業班での仕事に見通しをもつようになる11月に4週間設定し、「働く生活のリズムを経験し、働く意欲を養う」ことをねらっている。具体的には以下の目標を掲げている。

- ① 販売会を目指して一定期間集中して作業を続けることにより、作業能力を高める。
- ② みんなと協力して販売会を開く。
- ③ 製品がお金に変わり、そのお金で好きなものが買えたり、楽しめることがわかる。

従って、校内実習では、実習の後半に販売会を実施し、4週間継続的に作業を行う際の生徒の目標になるように、また、販売会後の打ち上げの機会も大切にしたいと考えている。これらのことは就労支援内容配列表の「目的意識を持って活動に取り組む」「自分の役割を果たすことで成就感を持つ」「責任を持って自分の役割を果たす」といった項目にも対応しながら中学部全体で取り組んでいる事である。

「3作業班で共通してつきたい力」を検証していく上で、生徒自身がここで挙がっている課題をどのように理解し、より主体的に自分の力を高めていけるかという点も大切にしたいところである。通常の作業学習では各班ごとに用意した日誌を使用しているが、校内実習期間、中学部では各班共通の実習日誌を用意して取り組んでいる。そこで、実習日誌の評価項目の内容については「3作業班で共通してつきたい力」を取り入れ、生徒にわかりやすく表現した。

各班とも、作業終了時に、生徒自身が、あるいは教員と一緒に確認しながら、評価の欄に◎○△を記入する。実習日誌を用いて毎日の作業を振り返り教員と一緒に評価を行っている。またそれらの項目の評価を総括して振り返られるように「がんばりシール」を用いて、その日の全体評価をシールの色であらわした。基本的に評価項目の欄がすべて、○以上になれば緑シールをもらうことができる。製作の数量が目標以上であった場合や自発的に友達の手伝いをするなど評価の基準以上に取り組む姿勢が良ければ金シール、△が1つ以上ついた場合は黄色、さらに△等が多い場合は赤シールという評価の視点を設定した。

平成 年 月 日 曜日 天気	
目標 (もくひょう)	
やったこと	午前(ごぜん) 午後(ごご)
今日のまとめ	① ちこくを しなかつた。 ② 相手(あいて)を 助(たす)めて あいさつできた。 ③ ほつきり 決(けつ)算(さん)ができた。 ◎ さいでまで がんばって 仕(し)事(じ)をした。 ○ 自分(じぶん)から 発(はつ)案(あん)ができた。 △ 今日(きょう)の目標(もくひょう)が 達(たっ)成(せい)できた。
学校から	
家庭から	

平成 24 年度版校内実習日誌

## 2) 各班毎に見た生徒の評価の変化から

校内実習日誌の「がんばりシール」の色を以下のように点数化し、その推移を見たのが図2である。

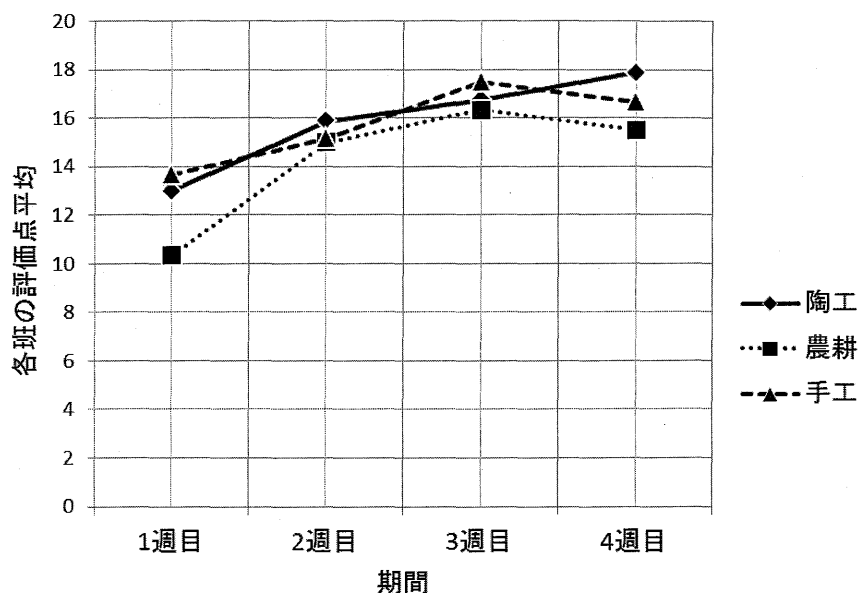


図2 陶工班生徒の実習日誌評価の推移  
(金シール4点・緑シール3点・黄シール2点・赤シール1点)

各作業班で、1週目から2週目にかけて大きく伸びている。3週目から4週目ではなだらかな伸びが見られている。このことは、実習日誌の評価欄の記述が○以上になることが増えていると考えられる。特に1, 2週目において顕著に表れている。

こうした生徒の変化から、生徒自身が日々の校内実習を通して、評価項目の内容について理解が進んでいると考えられた。後半はよい評価を高い水準で維持したいという気持ちがあらわれ、なだらかに点数が伸びていると思われる。

実際の校内実習場面の生徒の様子では、遅刻してしまった生徒は次の時間は休み時間になるとすぐに準備を始め、作業室へ移動したり、片付けが不十分な生徒は、細部まで気を配り十分確認してから報告する。また、時間を意識して取り組むことで、わからないことを素早く質問するようになるなど、取り組む姿勢に変化が見られた。

一方で良い評価をもらいたいという意識も高まり、評価項目やその日の製品の製作数などの目標を意識して積極的に取り組むことも増え、さらには、自分から目標製作数を決めて成し遂げようとする様子も見られ、目的意識や意欲の面での変化も見られた。これは4週間継続して作業に取り組むことで、評価項目を理解するとともに、目的意識や向上心、意欲の面においても変化が表れたと考えられた。とりわけ、こうしたことは学年が上がるほど顕著であった。

## 3. 授業改善

3年間の事例研究、校内実習の生徒の変化や様子から、「3作業班で共通してつきたい力」の内容で対象生徒の積み残された課題が明らかになった。この点について着目しつつ授業改善を行った。

陶工班では4月～11月まで、一つの製品を一人ですべて製作してきた。校内実習後はこれまで

一人で完成させていた製品の工程を分解し、一人一工程を担当する分業を取り入れている。

分業のねらいは、分業という仕事の形態を経験することで、生徒同士がコミュニケーションをとって製品を完成させる経験や分業や分担という働き方があるということを知ってほしいと考える。一方、一連の工程の中でも生徒に得意、不得意があり、自分の得意な工程を担当することでさらに自信や達成感、自己有用感が持てる、あるいは、個人目標に直接かかわる作業内容を担当して定着を図ることもねらいとしている。

今回の授業では事例研究で取り上げた3人の生徒において「3作業班で共通してつきたい力」の積み残しが見られた。そこで、マイペースで作業が進まない生徒は周囲の生徒の様子が理解しやすいよう友達の間に入って作業できるようにし、集中力に欠ける生徒は仕上げを担当し、集中して取り組まないと製品化できないような部分を担当するなど、それぞれの状況に合わせて分担箇所を設定した。

今回の授業では、関係性を築ける力をはぐくむ、生徒同士の関係性を高めるような内容でもあったが、どのように伝えれば友達が理解しやすいかなどの教員からの具体的なフィードバックがもう少し必要であった。さらに分業を意識させるために、自分が取り組んでいる工程が次の工程の人にどう影響するか、生徒にわかるような指導、あるいは生徒の配置の仕方など工夫の余地があると思われた。

#### IV. まとめと今後の課題

事例研究では、昨年度提案した「3作業班で共通してつきたい力」について検証し、どの項目についても必要なものであることがわかった。また追加する項目も明らかになった。これらの結果から、本校の就労支援内容配列表への修正についても提案することができた。

校内実習においては高等部における作業学習の段階性も考慮し、中学部段階で生徒がどのように自己理解し自己評価できるかということについても考えてきた。これらを通して本研究では中学部段階での一定の方針を確認したが、他学部とのつながりや作業学習以外の学習場面との関連性については今後さらに検討していく必要がある。

また支援内容配列表については内容について他学部と関係性を確認すると同時に、働く暮らしに必要な力とは何かについてももう一度考える必要がある。次年度以降、子どもたちの学部間での一貫した指導のあり方について実践を踏まえて、さらに研究を進めていきたいと考える。

#### 引用・参考文献

- ・東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要 No. 42 (1997)
- ・特別支援教育のためのキャリア教育の手引き、全国特別支援学校知的障害教育校長会編著 (2010)
- ・東京学芸大学附属特別支援学校研究紀要 No. 56 (2011)
- ・茨城大学教育学部附属特別支援学校研究集録 第32集 (2011)
- ・将来の働く生活を実現する教育、愛媛大学附属特別支援学校著 (2011)
- ・中学校キャリア教育の手引き、文部科学省 (2011)

## 作業学習（陶工班）学習指導案

日 時 平成 24 年 1 月 25 日（金） 9：40～11：10

対 象 中学部 1 年 2 名、2 年 2 名、3 年 4 名

場 所 陶工 2 室

指導者 中村昌宏（MT） 富田奈緒子（ST1） 矢間直世（ST2）  
岩淵真理（ST3）

### 1. 題材名「カップ製作（分業）」

#### 1) 中学部陶工班の作業について

中学部陶工班では、ものを作り育てる活動を通して働く態度や生活に必要な態度を身につけるとしており、その導入段階として自分に課せられた仕事を持続的に取り組むこと、道具の扱いに慣れることに重点を置いている。また、作業能力の向上や作業態度の育成を目指す職業教育的要素以外に、手指の巧緻性を高める、基本的な生活態度の育成に重点を置かれることもある。

陶工作业で扱う粘土の特性として、一定の力を加えることで形ができ、一度形作られたものがそのまま保持できるという可塑性に優れている事、焼成する前ならば元の粘土に戻すことができ、繰り返しの学習が可能であることが挙げられる。また、様々な道具を扱うことにより、手指の操作能力の向上を図ることや完成した製品が生活の中で使用される身近な食器であることから、製作する意味を理解しやすく、販売したり贈り物とすることで、家族や知人に喜ばれる経験を通し、意欲を持って製作に取り組むことができる。

陶工班では 1 年を 3 つの時期に分けて指導している。4 月～10 月は陶工班の製品の作り方を学び技術を向上させる期間、11 月はその技術を生かして、販売会に向けて集中的に製作する期間、12 月～3 月は分業体験を行い、様々な仕事の取り組み方や、友達同士で協力すること、自分の役割に責任を持って作業することを学ぶ期間としている。この時期の製作の中心は注文を受けた製品である。

#### 2) 「カップ製作の題材設定の理由」

中学部陶工班所属の生徒は 1 年生 2 名、2 年生 2 名、3 年生 4 名であり、男子 3 名、女子 5 名の計 8 名で構成されている。1 年生は初めて経験する学習であり、その流れや製作工程を理解するまでにある程度時間を要したが、これまでの学習を通して見通しを持って取り組めるようになった。2 年生は技術の向上、挨拶や報告についても理解が深まり、少しずつ自信を持って取り組めるようになった。3 年生は、自分で目標を設定し、見通しを持って積極的に取り組めるようになり、それぞれの段階で成長が見られてきている。

11 月の校内実習では日々の振り返りを日誌の評価項目に沿って行う中で、各々の生徒が自分にとって気をつけるべきことに気づき始めた。そこで、校内実習後の時期は個人目標に重点を置いて学習を行っている。個人目標は生徒と教員が話し合っで決定し、日誌に自分の目標を記入し意識して取り組めるようにしている。

本時の学習で取り上げる、カップの製作はこれまで、取り組んできた練り込み皿の工程を基本とし、実際にすべての生徒が校内実習期間に製作しており、全工程を理解したうえで見通しを持って取り組めるものである。その工程を分解し、分業という仕事の形態を経験することで、生徒同士がコミュニケーションをとって製品を完成させる経験や分業や分担という働き方があるということを知ってほしいと考える。一方、一連の工程の中でも生徒に得意、不得意があり、自分の得意な工程を担当することでさらに自信や達成感、自己有用感が持てる、あるいは個人目標に直接かかわる作業内容を担当して定着を図ることもねらいとしている。

### 3. 目標

- (1) 様々な製作工程を理解し、意欲的に取り組む
- (2) 持続して 1 つの製品を自分で作る
- (3) 協力して、1 つの製品を作る分業を経験をする

(4) いろいろな道具の扱いになれる

(5) 挨拶や報告がしっかりできる

#### 4. 指導計画

○分業した進め方を知る。4 h (2回)

○自分の課題を考える。2 h (1回)

○自分の目標を意識して作業をする。8 h (2/4回)

○一年を振り返る2 h(1回)

#### 5. 本時の学習

##### (1) 本時の目標

○分担した工程を丁寧に製作する。

○自分の目標を意識して作業に取り組む

##### (2) 準備物：教材

粘土、粘土版、ケース、布、たたら板、のし棒、型紙、カップ型、針、ろくろ、へら 作業用エプロン、帽子または三角布、作業靴

##### (3) 生徒の実態及び個人目標・手だて

名前	実態・分担	個人目標	指導の手立て	関連する個別教育計画
A 男子 中1	<b>【板づくり】</b> ○後半に並べ方が雑になる。 ○後半に疲れてペースが遅くなる ことがある。	○なるべく隙間がない ように並べる。 ○一定時間持続して作 業に取り組む。	○良くできている時に褒 め、気持ちを盛り上げる。 ○後半に励ます機会を多 くしていく。	
B 女子 中1	<b>【ひも作り】</b> ○ひもの表面が滑らかに仕上げら れないことがある。 ○時々話し言葉になることがある。	○滑らかになるよう意 識してひも作りを行う。 ○丁寧な言葉遣いがで きる。	○滑らかにできている時 は褒め意欲を持たせる。 ○話し言葉になったら指 摘しやり直しをする。	丁寧な言葉遣 いを心がける ことができる。
C 男子 中2	<b>【板づくり】</b> ○均質に延ばす事は理解できてい ない。 ○報告は促しが必要である。	○促しや、回数に応じて 均質に板を延ばす。 ○促しに応じて報告の 動作や発声ができる。	○教員は数を数えたり動 作指示を交え指導する。 ○報告では、教員は一緒 にお辞儀や発声をする。	日常生活に必 要な語彙を増 やすことがで きる。
D 女子 中2	<b>【ひも作り】</b> ○丁寧に製作するが集中力が持続 しないなどペースが一定ではない。 ○作業の進め方にムラがある	○決められた時間内に 一定量を作る。 ○時間を意識して取り 組む。	○製作個数を提示する。 ○速やかに取り組めてい る場合は称賛し、気分を 乗せる。	時間を意識し て行動する。
E 女子 中3	<b>【成形、仕上げ/班長】</b> ○丁寧に取り組もうとするが持続 しない。 ○全体への指示出しは自信がない。	○製品を丁寧に仕上げ る ○当日の号令を自分の 判断でできる。	○製品を一緒に確認し、 できていない部分は指摘 する。 ○予定を予め伝える。	
F 女子 中3	<b>【ひも作り】</b> ○丁寧に仕上げるが次の工程に回 すときの気遣いが少ない。 ○自己評価が適切に行えていない。	○次の人が作業しやす いよう、製品を置く。 ○適切な評価ができる。	○作業しやすい置き方や 等を教え、時々確認する。 ○教員と一緒に確認しな がら評価をつける。	コミュニケー ション能力を 高める。

G 男子 中3	【ひも作り】 ○丁寧に作る気持ちがやや強い。 ○製作に集中しすぎて、周囲を見ようとしない面がある。	○製品の良しあしがわかる。 ○時間や周囲の状況を考えて作業をする。	○製品の見本を示す。 ○時計を見せたり、次の工程の様子を伝える。あるいは、言葉をかける。	
H 女子 中3	【玉作り】 ○丁寧に作ることはできるが、時間が掛かってしまう。 ○返事や報告が自信が持てず、小声になってしまう。	○周囲の様子を意識して作業に取り組む。 ○相手がわかるように返事や報告ができる。	○次の工程の様子を伝えて、意識付けを行う。 ○しっかりできたときは褒めて自信を持たせる。	

(2) 本時の展開

時間	学習活動	指導内容	指導上の留意点
導入 9:40	○入室・準備 ○挨拶 ○本時のスケジュールや取り組む製品の説明を聞く。 ○自分の目標を確認する。 ○分担を知る	○全体に向けて挨拶する。 ○名札を返し身支度をする。 ○道具の準備をする。 ○作業内容がわかる。 ○自分の目標を知る。 ○担当教員がわかる。	○入室時、挨拶が不十分な生徒には声をかける。 ○見通しが持てるよう各分担の製作個数を教員が示す。 ○黒板に板書する。
9:50	〈作業開始〉玉作り[D,H] ○粘土玉を作る。 ○担当教員に報告する。 ○完成品を次の工程に移す。	○玉の大きさを意識する。 ○周囲の様子を意識する。 ○教員や友達にわかるように報告する。	○大きさや数を理解しやすいよう、指示シートを使用する。 ○次の工程の様子を伝える。 ○しっかり報告できれば称賛する。
	ひも作り (B,F,G) ○粘土をひも状にする。 ○担当教員に報告する。 ○完成品を次の工程に移す。	○ひもの太さと長さを意識する。 ○製品の良し悪しがわかる。 ○友達が分かるよう報告する。	○大きさや太さ、数が理解しやすいよう、指示シートを使用し、具体的に見本を作って見せる。 ○不十分な場合はやり直しをする。
	板づくり (A) ○色別にひもを並べる。 ○粘土を叩いて板にする。 ○担当教員に報告する。 ○完成品を次の工程に移す。	○粘土の色や長さをそろえる。 ○全体的に延ばす。 ○次の工程の友達に報告し製品を渡す。	○ひもの置き場を粘土の色別に分け理解しやすいようにする。 ○隙間を教員と一緒に確認する。 ○友達に大きな声で報告できたときは称賛する。
	板延ばし (C) ○のし棒で粘土を延ばす。 ○担当教員に報告する。 ○完成品を次の工程に移す。	○促しに応じて粘土を均質に延ばす。 ○友達にわかるように報告する。	○均質に延ばせているか確認する。 ○教員と一緒に報告し、できた時は称賛する。
	成形、仕上げ (E) ○粘土を切り、型に巻く。 ○カップの底をつける。 ○担当教員に報告する。	○粘土を丁寧に型に合わせる。 ○底を取り付け、内側に溝ができないよう気をつける。 ○完成を判断し、報告する。	○型より大きめの型紙を用意し、巻き易いよう配慮する。 ○内側の修正を特に丁寧にできるような声をかける。 ○教員と製品の出来を確認する。



10:50	○作業を終了し片づけを行う。 ○日誌を記入する。 ○名札を返し、挨拶をして退出する。	○班長は作業終了の号令をかけ、各自、片づけを開始する。 ○自分の作業を振り返る。 ○自分の目標を振り返る。 ○全体に対して挨拶ができる。	○各担当教員は生徒と一緒に振り返りながら日誌を記入する。  ○退出時の挨拶は大きな声ではっきりできるよう言葉をかける。
11:05			

## 6 評価

### (1) 本授業の評価

生徒	個人目標	評価/○△×	コメント
A 男子中 1	○なるべく隙間がないように並べる。 ○一定時間持続して作業に取り組む。		
B 女子中 1	○滑らかになるよう意識してひも作りを行う。 ○丁寧な言葉遣いができる。		
C 男子中 2	○促しや、回数に応じて均質に板を延ばす。 ○教員の促しに応じて報告の動作や発声ができる。		
D 女子中 2	○決められた時間内に一定量を作る。 ○時間を意識して取り組む。		
E 女子中 3	○製品を丁寧に仕上げる ○当日の号令を自分の判断でできる。		
F 女子中 3	○次の人が作業しやすいよう、製品を置く。 ○適切な評価ができる。		
G 男子中 3	○製品の良しあしがわかる。 ○時間や周囲の状況を考えて作業をする。		
H 女子中 3	○周囲の様子を意識して作業に取り組む。 ○相手がわかるように返事や報告ができる。		

## 7 備考

作業配置図

